

ことばから芸術へ

——Royal College of Art 訪問から得られたもの——

A Linguistic Approach to Artistic Activities: Observing Classes at the Royal College of Art

Naohiko Tamai 玉井 尚彦

序

2016（平成 28）年 11 月末～12 月初頭にかけて、本学と交換留学の提携を結んでいるイギリス・ロンドンの Royal College of Art（RCA）を訪問した。なぜ学科教員が海外の美術大学院を訪問しようと思いついたのか—外国語担当教員として、「ことばの学び」をどのように本学に導入するか、さらに広くは今後の学科教育を考える上でどのような貢献が可能か、ということを探るのが狙いであった。結果として、得られたものは当初の予想をはるかに越えるものであったという感触を持っている。

表 1 今回の見学内容

11/28（月）午前・午後（campus：Battersea）
School of Fine Art の crit （担当：David Rayson（head of Painting programme））
11/29（火）午前・午後（campus：Battersea）
School of Fine Art の crit （担当：Jordan Baseman（head of Sculpture programme））
11/30（水）午前・午後（campus：Kensington）
Visual Communication programme の授業 前半：elective（担当：Debbie Cook（tutor）他） 後半：critical forum （担当：Rathna Ramanathan（head of programme）他）
12/2（金）午後 （campus：前半 Kensington、後半 Battersea） 前半：EAP の説明（担当：Siân Lund（EAP co-ordinator）） 後半：EAP 授業（担当：Simon King（senior tutor））

この週は、ちょうど各 programme¹ の枠を越えて、school 単位での crit（合評に近いもの）が行われる時期であった。ここで興味深いのは、たとえば School of Fine Art であれば Painting, Sculpture などの programme の枠を越えてさま

ざまな関心の学生が 1 つのグループにまとめられ、1 人の教員が担当する、という方式をとる点である。従って、自分が所属する programme 以外の、普段指導を受けない教員も担当になる。本学よりも規模の大きい大学院²であるため、この日に初めて知り合う学生同士、また教員と学生が、初見の作品について議論を交わす状況が生まれる、という点が重要である。この crit を含めて、elective（選択科目）や EAP³ 科目など多様かつ有意義な見学の機会に恵まれた（表 1）が、特に 3 つの点を中心に、芸術とことばについて考えたことを以下に記したい（なお、現地の雰囲気伝える意味でも、日本の慣習と異なりファーストネームで個人に言及したい）。

芸術とことば（1）多様性と普遍性

第 1 日、朝の渋滞のバスに揺られてテムズ川の南にある Battersea Campus へ向かい、David（Painting programme）担当の crit を見学した。今回は修士の院生 8 名、各人の持ち時間は約 40 分で、最初に学生が作品を見る時間を数分作ってから討議を開始する。発言をためらう学生の意見も聞けるように、討議が過熱しすぎたらある程度抑える、との話であった（尤も、この日は収拾がつかない事態にはならなかったが）。また、発表者が討議に集中できるよう、たとえばそこで登場した知らない作家の名前やウェブサイトなどの情報にとらわれなくて済むように、David が討議の要点を書き留めた上で発表者に後で渡す、という形態をとっていた。

開始前に David と少し話す時間があったので、「作品を客観的にことばで語るのに苦勞する学生が多い状況の中、どのようにことばを使って芸術を語るのかを考察する機会としたい。」という趣旨を伝えてみた。彼の答は柔軟なもので、「芸術家は話すことが好きな人ばかりではない、

むしろ出さない人もいる。話すという方法で伝えるのが苦手な人の場合、予め書いたものを用意して発表に使ってもよい。場合によっては音楽を添えることなども可能である。」とのことであった。これは、複数の伝達手段があればより有効な伝達ができる、という見方もできる。話すことに過剰にとらわれる昨今の趨勢に流されず、バランスのとれた外国語教育を行う重要性を改めて感じた。

この日の見学で感じたのは、我々が日本で正面から向き合って議論するのをつい避ける傾向にあるようなトピックをも積極的に扱う、という点であった。一例をあげると、ネイティブアメリカンのケチュア族の映像を扱った映像作品があった。2年にわたり、各回につき2週間ずつ、このコミュニティを訪れて撮ったものであり、あくまで外部者としての立場を保つ点が鍵である、と発表者は説いていた。彼らが外部からのみでなく内部でも排斥を受けていることがある、という側面を描き出したようであったが、「究極の注目点は何か」という質問に対しては、大きな問題であり今まさに取り組んでいる過程であるとの返答であった。この他にも、政治的に難しい問題に正面から取り組む作品⁴は複数みられた。



写真1 critの風景(1)
(中央で紙を持っているのがDavid: この紙にメモをして発表者に渡す)

この議論は、言語学を専攻する私にも興味深いものがあった(文化人類学にも通ずると思われ、実際その点に言及した学生もいた)。少しコメントしたのだが、言語学の歴史をみると、アメリカでChomsky以来の生成文法の潮流の中で、ネイティブアメリカンの言語研究⁵は頻繁に取り上げられてきた。ただそれは言語の普遍性を探るための過程としてであり、相違をそれとしてそのまま記述して終わり、というものではない。そこで、この「普遍性を探る」ことと今回の研究にはどのような関連がみられるか、という質問を投げかけてみたのだが、少し考えた後「笑いは共通だと思う」という答であった。私が議論したかった方向は、表面的多様性(複数の個別言語)の根底にある共通点であり若干趣旨がずれるのだが、一般論としてはひとつの答ではあるし、他の学生が話を補ったこと

もあり、この話はここで止まった。私が「文法」ということばを出して問いかけを行えば、少し別の進展を見せたのかも知れない、と後になって思った。普遍性という概念を出す前段階として、言語の多様性には言語発達・通時的(個別言語内)・共時的(複数の個別言語間)の3つのレベルが存在することに言及した上で、その中の共時的な部分を議論する土台として個別言語間の差異を例示すべきであったかも知れない。今回は話がそれすぎることを避けたのだが、言語理論を難しすぎない形で、ことばへの興味を誘う手段として援用する方法というのは、常に探り続けているものである。2014(平成26)年度の総合基礎実技でオノマトペを軸に音の造形を考えた際にも試したが、さまざまな興味の方向から実技制作にアプローチするための手段のひとつとして「ことば」を位置付けつつ、学科教育を今後充実させるのに役立てたい。

芸術とことば(2) 経験の再翻訳と表現の連鎖

第2日も Battersea Campus にて、今度は Jordan (Sculpture programme) 担当の crit を見学した。今回は修士の院生7名、各人の持ち時間は前日と同じく約40分、ただし最初の20分は発表者以外が作品について思うところを議論し、その後で発表者が議論に加入する、という形であった。Jordan は自らの方針について、結構 critical に行く(もちろん建設的な意味で)と言っていた。と同時に、「作品もことばである—作品、書くこと、話すこと、全てがことばである。」と語り、表現方法に関する柔軟性も伺えた。この日の crit は全体として、作品をことばでどのように表現するか、というテーマについて興味深い題材を与えてくれた。他にも興味深い作品はあるのだが、ひとつのテーマに絞って「ことば」の視点から考察したい。

2つのスピーカーを向かい合わせに配置し、一方からは水の滴る音、もう一方からは囁き声が聞こえる、という作品があった。ここではイマジネーション、現実に対する理解、といった概念が議論されたが、‘inside the narrative’ という表現は興味深かった。narrative という概念自体は言語学や文学でも議論されるものであり、その作品の世界の中で、という把握は分野を越えて共通するものであることを再認識した⁶。ここで学生の一人が作品への言及において soundscape という語を用いた。そこから、この作品がある場所に特定の位置づけの意味をもつかどうか、という話に発展したのだが、この語から私が想起したのはNHKラジオ第2放送の「音の風景」という、滝などの名勝や地方の祭りなどを音で紹介する番組であった。番組ではナレーションが入るのだが、もしこのナレーションがなかったら番組から浮かぶ風景も変わって来るのだろうか、といったことを考えさせられた、と私から少し

言及してみた。



写真2 critの風景(2)
(左手がJordan: 本文で言及した作品および発表者と一緒に)

さて、この soundscape という概念は、この日の午後の発表で再登場することになる。先程の発言の学生の作品で、音がカチャカチャと鳴っていて、画面につないである黒いボードに手を触れるとその感覚が伝わる、というものがあつた。これは勿論、感覚的経験を掘り下げることが狙いなのだが、ここで彼が再び soundscape という表現を用いて自分の作品に言及した。ここから、それはどういった意味なのか? といった掘り下げの作業が始まった。そもそも landscape とは何か、という原点に話が戻つた。そこで、参照する要素として空間・イメージ・匂い、などの要素が列挙されたが、次に「もしその語彙がなければどうするか?」という問いかけが為された。発表者は friction (摩擦) と言い換え、より分かり易く open-ended な(幅広い解釈のできる)表現になったというコメントがあつた。さらにそれを言い換えると、というところから vibration (振動) という概念に至つた。この表現の連鎖を考える作業を通じて、あるひとつの経験を別の経験へと再翻訳する作業の重要性を確認できた。

芸術とことば(3) 意思疎通の創発

4日目に、EAP (English for Academic Purposes) の授業のうち、RCA では必須の dissertation (修士論文)⁷を見据えてのひとつの段階として、英語が母語でない学生を主な対象として⁸ライティング学習の補助を行う授業を見学した。日本と違って欧米では自らを積極的に主張し、討議は白熱する—このような世間でよくあると思われるイメージが常に真とは限らないことは、自分自身が14年前にカナダへの交換留学の経験を通じて知っているつもりであつた(そもそも、「〇〇人は〇〇である」という極端な一般化が真実を捉え損ねることは往々にしてある)。に

もかかわらず、フリートークを促すがお互いが遠慮して話が弾まない、という光景は日本独特であるようなイメージをなぜか抱いていた。さて実際にRCAのこの授業ではどうであつただろうか。この日の議論の中で、「イメージとは何か? ペアで話し合ってみよう。」という課題があつた。すると、全体が沈黙に近い状態になる—この光景が発生したのであつた。抽象的・哲学的な話というのは言語技能の高さによらず難しいものとみえる。偶々同一言語を母語とするペアでは、英語でなくその言語で「つい」話す、という状況も発生した⁹。しかし、学生が予め書いてきた宿題を題材に話してみよう、というペアワークを始めたところ、得意な学生が不得意な学生の書いたものを読み、そこから感想を述べることから会話が成立する、という意味疎通が生まれる過程を目の当たりにした。



写真3 EAPの授業(左から2人目が担当教員のSimon)

さらに、この dissertation の作成過程を通して、美術における抽象的・論理的思考の重要性を再認識した。制作はその過程そのものだけでなく何らか確固とした考えに裏打ちされていなければならない、ということ自体は自明かも知れないが、これは本学の学科教育と実技教育がより効果的に協力するためのヒントを与えてくれると思った。留学生向けに美術のヴォキャブラリーを補う授業があると最初聞いたとき、実技制作に直接携わっていない私は、たとえば「印象派」「シュルレアリスム」のような粹組や、制作に使う材料などの英語での呼称を思い浮かべたのだが、実際には「イメージ」「スキーマ」など、むしろ私の専攻する言語学とのかかわりも見出せるような概念を取り上げており大変興味深かつた。と同時に、さまざまな学科分野の専任教員が所属しており、学生の美術分野での活動にいつか結びつけばという姿勢で、しかしそれに合わせるというよりは各教員が自らの研究分野をそのまま提示してそこから学生に興味を見出してもらう方向で教育を行っている、現在の方針をうまく活かし

ていく方向性を再確認できた。

芸術とことば（補遺）

上で詳述したものの他にも、さまざまな機会に恵まれた。見学4日目の前半、EAP(English for Academic Purposes)のプログラムのコーディネーターである Siân に会って状況を伺った際には、彼女自身が言語学を学んだ経験があるということで、研究についても話が盛り上がった。また見学3日目、Visual Communication programme における elective (10名の学生が前回の作品からどのように進展したか、という点に着目して合評を行う) および critical forum (論文作成過程での進捗を2人の学生が発表する) では、いずれも school 単位でなく Visual Communication の内部で集まる形ではあるが、特に午前の elective では、ゲストとして外部からの教員を招き、修正という視点だけでなくそれを初めて見る者からの視点を加えていた。明示的なプラスの表現をもってその進展を評価しようという姿勢も興味深かった。たとえば“You've removed fantastically from [...]” “It's so good we have nothing more to say about. Congratulations!” といった具合である。午後の critical forum でも、“Panic is luxury.” と論文執筆中の学生を励まし、悩むことの重要性に言及すると同時に、不安・パニックで終わらずにコントロールも、と説いていた。

結び 今後の外国語教育と国際交流へ

昨今の日本では、読むことに重点を置いた従来型の英語教育に対する批判が高まり、もっと話すことに重点を置くべきである、という考えのもとにさまざまな改革が行われている。「読む・書く・聞く・話す」という4技能をバランスよく伸ばすべきである、という点は勿論当たっている。しかし、たとえば英語の授業を極力英語で行うことが、また英語教育の開始年齢を早めることが、果たして問題解決のための決定打となるのか、私は甚だ疑問を感じていた¹⁰。私の本学における英語授業では、今年度から高校で英語授業を英語で行うことを基本とする新課程¹¹のもとで履修した学生も考慮して以前よりは英語で話す割合を上げてみたものの、日本語をまじえて理論的な説明をするのが適切なところは従来通りの形を保ち、読むことの重要性も引き続き強調してきたのだが、今回の訪問は、少なくとも本学の英語授業においてはその方針が的外れではなかったことを確信させてくれた。意思伝達の手段として、話すことで伝えきれない部分を補うには書くことが、そしてそれらの力を養うには読む・聞く力を養うことが重要なのであり、4技能で軽視できるものはないのである。

さらに、表面的な技能以外の問題も存在する。ちょうど韓国出身の学生と話す機会があったのだが、彼女は RCA に入る前からイギリスで学んでいて通算4年目になり、英語に不得意な意識はなかったのだが、それでも入学時に難しさを覚えた、とのことであった。語彙はその都度教えてもらえれば何とかなるものであって問題でなく、むしろ文化的な部分での難しさを感じる、と語っていた。勿論この1人の声をすぐに一般化することはできないが、今回他にもアジア系の学生の発表を聴いて、欧米系の学生との間に、即座に英語で返す技能に差があるケースは複数見受けられた。現在日本で声を大にして叫ばれている、英語での授業・早期英語教育といった方法が果たして根本的な解決策になるのか一問題はもっと根深いものであり、異文化の受容というところからの教育が鍵なのでは、いや、さらには母語であるか否かによる差はある程度受け入れるとして、あとはどのようにそれを補って自らを表現する術を持つかが重要なのではなからうか、ということ改めて感じた。

現在、本学からと RCA から、毎年各々3名ずつ交換留学生を派遣しているが、現地の担当教員は本学学生を寛大に見守って担当して下さっているように感じられた。今回、あいにく都合が合わず日本からの留学生、特に本学からの交換留学生の発表を聴く機会はなかったのだが、言葉の壁は既に克服した上で来ることが前提条件、というような厳しい雰囲気は感じなかった。もちろん各個人の中では、自分の意思を的確に伝えたいが伝わらないというジレンマを感じる機会はあるだろうが、徐々に克服する、というスタンスを許容しない空気ではなかったので、学生には「準備が完璧にできないと留学に応募するのはためらう」という姿勢でなく、積極的に試してほしい。さらに現地の教員から、日本・さらに京都には興味がある、今後教員間の交換なども含めた交流が可能になればよいと思う、といった声もあった。実現までに考えるべき課題は存在するにしても、今後のひとつの発展可能性として興味深い選択肢であろう。

謝辞

今回の在外研修にあたり、本文で言及した、授業の見学を快諾して下さった RCA の先生方に加えて、有意義な見学プログラムを組んでいただいた Maria Ohlson 氏 (Senior Registry Administrator, RCA)、RCA との連絡でお世話になり有益なご助言をいただいた上村絵梨子氏・青嶋絢氏 (本学国際交流室)、本報告の前段階の発表でご意見をいただいた 2016 (平成 28) 年度後期美術学部テーマ演習「Talking about Art—芸術とことばの相互作用—」の松井紫朗教授・Simon Fitzgerald 教授 (本学美術学部) な

らびに受講学生の皆様に、感謝申し上げます。なお、本報告は2016（平成28）年度京都市立芸術大学特別研究助成「京都市立芸術大学における『ことばの学び』の導入—言語学から芸術へのアプローチ—」（研究No. 2016-003）を受けて行われた研究成果の一部です。

註

- 1 RCAの案内などではこのイギリス英語のスプリングで表記している。
- 2 Painting programme だけでも、修士課程に100名以上が在籍している。
- 3 English for Academic Purposes の略。
- 4 第1・2日の見学の中でこの他にも、ポストコロニアルな世界における母親の地位、サウジアラビアにおける女性のアイデンティティ、力での支配・被支配の関係、などを扱った作品を見た。
- 5 たとえば次の文献では、Navajo, Ulwa, Tohono O'odham, Hopi の4言語を生成文法の観点から考察している：
Hale, Ken, and Samuel Jay Keyser (2002) *Prolegomenon to a Theory of Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

- 6 同様に、他の授業で discourse を近い文脈で用いていたが、これは言語学ではまさに「談話」という、複数の発話文がつながってできた単位であり、この背後に潜む特定の状況などがコンテキストの一部となる（田窪行則 他（1999）『談話と文脈』岩波書店。など参照）。
- 7 School of Humanities の Critical and Historical Studies (CHS) programme が、dissertation 作成の指導を各実技 programme に対して提供している。
- 8 英語が母語であってもライティング自体の得意不得意はあるので、英語を母語とする学生でもクラスサイズ次第では希望者を受け入れている。また、本学からの交換留学生のように現地での修論を目的としない場合も、勉強のために受講することがある。
- 9 担当教員の Simon によると、必ずしも共通の母語の使用を禁じているわけではなく、論理を発展させる手段として機能するのであればそれも認める、という柔軟な姿勢をとっているようであった。
- 10 そもそも、中途半端にでなく真剣にその形を導入するのであれば、教員側の準備ができるように、制度上のかなり入念な整備が必要であろう。
- 11 2013（平成25）年施行の高等学校学習指導要領による課程を指す。

